
少年ユウサク物語

ユウサク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年ユウサク物語

【Nコード】

N6828E

【作者名】

ユウサク

【あらすじ】

両親の離婚、再婚にもめげず、一人の少年が成長していく物語です。

泣くなユウサク（前書き）

作者の半生を基にフィクションを交えて書いています。なかなか波乱万丈な少年期ですが9割実話です。

泣くなユウサク

第一章泣くなユウサク

パリーン！！ガシャーン！

「やめてや！ユウサクに当たったらどないするん！！怪我するやんか！」

父親が身近にあるものを母親に投げつける。母親はそれをよけながらもさらに父親を挑発する。

「なんや！！金か！子供か！好きなほうとつたらええやないか！！」

そう言うがはいか、ユウサクは父親に抱きあげられ・・・そのまま放り投げられた。

「なにすんねんな！！」間一髪母親に抱きとめられユウサクは泣き始める。

「どっこもいたないか？」ユウサクの顔を覗きこみ母親が尋ねる。

「ママア・・・」怖ないで、大丈夫やで「父親に向きなおり、

「そんなもんユウサクに決まってるやろ！金とかいらんわ！」

母親の名は「よしこ」神戸の普通の高校を卒業し父のついで工場の事務員として働きだし、20才の頃、同じ職場に努める「ゆづいち」と出会い交際を始め、ゆづいちが独立、会社を興してから結婚。ゆ

ういち26才、よしこ24才の時にユウサクは産まれた。

よしこは実家から少しでもはやく出たかった。幼いころに両親が離婚、

父の再婚相手は出産経験がなく子供に冷たかった。姉ひとり、弟ひとりの三人兄弟で、別れた母も再婚して娘を生んでいる。よしこは8才違いの妹だ。子供の頃から2才上の姉と二人で家事をやりくりしていたが2年前に姉も結婚、弟は中学の頃からぐれてしまい家に帰ってこない。ヤクザの事務所に出入りしているらしい。

父の留守に母と二人でいるのは、もう限界だった。そんな時にゆういちに出会う。そう激しく恋心を抱いた訳ではなかった。「独立しよう、おもてんねん。」その言葉を聞き（結婚すれば家を出る事が出来る）そういう打算でプロポーズを受けた。

結婚してからのゆういちはよく働いた。西宮で事務所を開き。すぐに人手が足らなくなり、若い子を2人程雇って朝から夜中まで働いた。そんな苦労を横目でみながらよしこは好き勝手に暮らした。自動車学校に行き免許を取った。（教習者がトヨペットクラウンだった。）それだけの理由でゆういちにクラウンを買わせた。2人で住んでいたアパートが手狭になり、住宅地に一戸建てを購入した。ますます仕事に打ち込むゆういちには遠方の仕事なども受けるようになり、たびたび留守にするようになる。

よしこは暇を埋める為に実の母親の産んだ妹を高知からよびよせ、ユウサクの面倒を見てもらい近くのスナックに遊びにでは酒のみ、たまに店を手伝う事もあった。よしこと同じ年のスナックのマスターには年上の妻とユウサクと同じ年の女の子がいた。

よしこはスナックのマスターと恋仲になっていた。ゆういちが留守

の時など家に招きいれる事もあった。そこまで大胆になればおのずと近所で噂になり・・・いつしかゆういちの耳に入る。そして夫婦喧嘩、最後は離婚であった。

子供を選んだ筈のよしこはユウサクを高知の母と妹に預け、スナックで働き始めた。

ユウサク2才の時である。

泣くなユウサク（後書き）

初めてかいた連載物です。読みぐるしい部分も多々あると思います。読んでいただいた方に評価、コメントを頂けると、次回に向けてもっとよい物がかけると思います。どうぞお願いいたします。

土佐の高知のはりまや橋

第二章・・・土佐の高知のはりまや橋で

土佐あのおく高知のはりまや橋で、ぼんさん（坊さん）かんざしい
買うをくみくたくヨサコーイヨサコーイ（

ユウサクは4才になっていた。

「りつこ姉ちゃん！もうおやつのお時まわっちゅーろー！ミックスジ
ユース！」

「おーのお、なにいーゆーが！、さっきクリームソーダ飲んだんは
どこの誰やったかね？」「りつこねえちゃんのけちんぼ！！！」

高知県高知市、鏡川の傍で暮らす祖母の家にひきとられ2年がたっ
ていた。

カツオの飴の老舗である祖父（祖母の再婚相手）の商売を手伝いな
がら、祖母と伯母であるりつこは、喫茶店を営み交代でユウサクを
可愛がり育てていた。

ユウサクといえは、やはり母がいない寂しさがあつたが、それを隠
し、明るくふるまい近所では「ようしゃべる子」として知らぬ者は
いなかった。

祖母も伯母も仕事の傍らでユウサクの面倒をみてはいるが、行動範
囲の広がったユウサクの相手はなかなかできず・・・保育園に預け

てはみたものの、初日のお迎えの時に「申し訳ありません。うちではお預かりしかねます」と初日で退学処分。そんな事が二回もつづいた。

身体は華奢だが、自己主張が強く、他の子供に乱暴はするは、昼寝の時間にまったく眠らずみんなをおこしてまわり大騒ぎ・・・

5才になった時に隣町の保育園にあきが出来た。だめもとでお願いしてみると・・・同じように暴れてはいたが、特に問題なく過ごしていた。

・・・がそれもいつときの事、昼寝の時間に友達を起こし、「シヨツカーになれ!」と、自分は机の上から仮面ライダーになりきり

「トッツ!」

ところが怖くなった友達はそこから逃げて、飛んでしまったユウサクは肩から床に墜落・・・病院に運ばれて診察を受けると、「鎖骨骨折」

しばらくライダーキックはしなかった。

そんなユウサクは少し大きくなって(6才)近くにある都電西部デパートにいつては一人で遊んでいた。(乱暴すぎて友達がすくなかった)

お小遣いを貰ってはゲームコーナーへ、使ってはうちに帰りまた小遣いをせびる。(ユウサクの金遣いの荒さはこの頃培われていたのかもれない。)

祖母は特に彼を愛したが、やはり一番恋しい時期に母が傍にいないのはさびしく、近所の神社にいつて狛犬の裏に座っては一人で泣いた。

ある日ユウサクは浮かれていた。明日はイモ掘り遠足。母が来る前々から約束していた。その日がくるのを毎日いまかいまかと指折り数えていた。

しかし母は来なかった。

台風が近づいていて帰るめどが立たなかったからである。しかしユウサクにそれが理解できる筈もなく・・・叔母のりつこが「ねえちゃんが一緒にいきね！」と一生懸命なだめるが・・・「ねえちゃんはお母さんとは違うき！もう僕保育園もいかん」泣いて動かず、結局遠足を欠席した。

祖母が自転車を買ってくれた。

補助輪のついてないタイプの自転車で、一時間くらいでのれるようになり・・・嬉しさのあまり普段通らない場所まで走ってしまった。一生懸命もときた道を探すが見つからない。ひとりで泣いている所を米屋の主人が保護し交番に連れていく・・・そこには、心配でいてもたってもいられずに探しにきていたりつこがいた。

「どこに、いつちよったが？おばあも心配しちゅうろ、」
安心したユウサクは叔母に抱き付き泣いた。

続
く

土佐の高知のはりまや橋（後書き）

いくつかストックがありますので、まだ何話かは投稿出来そうです。

アンブレイカブルな話

第三章・・・アンブレイカブル

最近のユウサクはもっぱら外で遊ぶ事が多かった。自転車の存在はさびしさを埋めてあまりあるもので・・・もう迷子になるような事もなく、真白なボディーに青いラインのキラキラした自転車で商店街を誇らしげにはしり回る。

最初の何日かはよく転んだ。あちこち擦り傷をつくるユウサクを祖母やりつこは心配していたが・・・隠れて泣くような事が無くなって、逆に安心するようになっていた。

ユウサクには二つ年上の親戚が一人いた。従姉弟のゆうこである（大きくなって判った事だが、ゆうこは自分の母よしこの従姉弟だった。）

幼い頃からよく後をついてまわったが、ゆうこが自転車に乗るようになってからは、彼女と遊ぶ事もほとんどなくなっていた。自由に運転できるようになったユウサクは、思いついた。

「ゆう姉に会いにいったって驚かそう！」もう夕方になっていたが、思い立つと我慢出来ないのが子供である。祖母につげれば「明日にしないさい」と言われる事が判っている。

ユウサクは黙ってゆうこに会いにいった。

歩けば30分かかる道もひとたび自転車に乗れば、風を切るスピードであつと言う間にゆうこの家（祖母の弟の家）についた。

息を切らして玄関から「ゆう姉!!」叫んでみるが、返事はない。もう一度大きな声を出そうと思いつきり息を吸い込んだ時に・・・。「誰ぞね?」ぬつと出てきた大きな体躯の白髪交じりが聞き返す。あわてて喋れずむせかえるユウサクをみて、「おお、何じゃ、ユウサクかよ? ゆうこは友達の家におよばれにいつちゆうきおらんぜよ。」祖母の弟である。

「何時に帰ってくるが?」「わからんにや。おんしゃあもう遅いきね、はよ帰らんと姉さんにわしが叱られるき、おんちゃんが送っていか?」

「いらん! 僕ひとりで帰れる!! おんちゃんバイバイ!」

落胆したユウサクはかっぱしてきた道をとぼとぼと帰って行った。

ユウサクにとってゆうこは幼いころの淡い恋心の対象だったのかもしれない。

家の傍まで帰るとあたりはすっかり暗くなっていた。ユウサクが自転車を押して帰ってくると、家の前でりつこが待っていた。(怒られるかな?)とおもいつつもりつこが待っていた事が嬉しかったユウサクは横断歩道を確認もせずにいちもくさんにかけて出した。

「危ない!!!」

振り向くと車のヘッドライトが迫っている。恐怖に押していた自転車を手放し、しかしよける事もできずに固まってしまった。

キキーン！！！！ドン！

車のボンネットに跳ね飛ばされたユウサクは5〜6メートルほど先の道路に落下。

顔面蒼白の運転手が飛び出してきて「だれか！救急車を！」

びくりとも動かないユウサクにりつこが駆け寄る。「ユウサク！大丈夫か？」驚きと恐怖で固まっていたユウサクはやつと声がだせた。

「うわーん！うわーん！いたい、いたい」

そのまま動かす訳にもいかず。まわりがおろおろしているとすくつと立ち上がったユウサクはりつこに自分のひざとひじを見せた。

「血い出た。いたい。」それぞれ擦りむいて少し血がでていた。

「他は、どっかいとうはないか？」

擦りむいた傷が痛い事しかわからないユウサクは「バンドエードはつてー！」

念のため病院にいき検査してみるも擦り傷以外はまったく以上なし。子供の骨がやわらかい事と綺麗にバンパーに乗り上げた事が幸いしたのだから・・・と医者はいった。

「暗くなる前に帰る事。」

それから毎日ユウサクは言われ続ける。

されど父

第四章・・・されど父

ゆういち・・・ユウサクの実の父親

よしこ・・・ユウサクの母親

りつこ・・・ユウサクの叔母（よしこの妹）

祖母・・・よしこの実の母親

おんちゃん・・・祖母の弟

ゆうこ・・・おんちゃん娘（よしこの従姉弟）

たつや・・・ユウサクのおじ（よしこの弟）

ひでき・・・スナツクのマスター

ユウサクが高知にきて4年目に入っていた。

ゆういちが離婚後会社を倒産。高知にできてきて所帯を持っていた。たびたびユウサクに会いにきては服やおもちゃを買い与えてくれた。が・・・幼年期の記憶が色濃く残っていたユウサクはあまり父のことが好きではなかった。またゆういちの再婚相手にはユウサクより一つ年上の男の子の連れ子がいて、その兄のような相手は一生懸命ユウサクにやさしく接していたが、ユウサクが心をひらく事はなかった。（自分にはお父さんもお母さんもない。なのにこいつは両方持つてる。）そんな思いがユウサクの心の中で「嫉妬心」として作用してしまったのも仕方がない事かもしれない。

ある日祖母がユウサクに告げる

「おとうさんが迎えに来ると！明日来るきね、お洋服やおもちやばあかたづけとかないかんよ」

あきらかに不機嫌な祖母の態度にユウサクは疑問を口にする。

「おとうさんがくるなら、僕はお母さんところには行かれんが？」
少し間があり祖母は答える。

「まつことユウサクはませちゅうね！ おとうさんがよしこのところまで連れて行ってくれるきね！なーんも心配はいらんわえ」

納得できた訳ではなかったが（母に逢える）それだけ確認がとればユウサクには後の事はそれほど大事な事には思えなかつたので、それ以上詮索はせず、素直に祖母に従った。りつこがいつしよに（というかほとんどりつこが）片付けを手伝い、涙ながらに「ユウサク、ねえちゃんのこと忘れたら承知せんきね！」なぜ泣くのか？わからぬユウサクはこう言う。

「うん、僕大きくなったらりつこ姉ちゃんと結婚するき！迎えにくるきね！まつとうせ」

「ほんに・・・どれぐらい待つるーね、ユウサクが大人になるまで」

泣き笑いしたりつこに胸をはってユウサクは笑う。

次の日、早朝に おとうさんはやってきた。「御苦労さんやったねえ・・・ ひできさん、よしこの具合は？どうでするー」

「ちよつとしんどいみたいやから置いてきましたけど・・・ほんまは迎えにきたいってゆつてたんですけど、一人やないんやから、ゆつて置いてきました。」

そこには父の姿はなく・・・そうあのスナックのマスターがいた。

(お父さんと違う)

「ユウサクくん久し振りやな！今日からおっちゃんがおとうさんや
で」

頭をなでられながら説明をつける。どうやら母はこの男と夫婦にな
っているようだ。あのおばちゃんは？(ひできの元妻)あの子
は？(ひできの娘)どうなったんだろう。ひできが仮眠をとってい
る間、悶々と考え続けるユウサクであった。

夕方になり(一泊していけ)という祖母を振りきり、ひできはユウ
サクをつれて出発する。フェリーが出る港まで何時間もかけて山道
をゆく。ユウサクが車酔いするようになったのはこの日からではな
いだろうか。

丸一日かけて西宮のスナックについた時まっさきにあいたかった母
は迎えにも出ていなかった。(お母さん!)靴を脱ぐのももどかし
くかんじながらスナック(昼は喫茶店)の裏口から上るうとすると
・・誰かに突き飛ばされる!

転んだユウサクが上を向くと女の子がこちらを見下していた。

「あんた誰？勝手にうちに上がらんといてや！」それを見たひでき
は、

「こら！ちえ！きょうからユウサクは兄妹になるんやから仲ようせ
なあかんでってゆうとったやろ!!」

「うちそんなんしらん！」

バシッ！ちえはひできに頭をはたかれた。「パパあ、うち悪ないのになんで叩くん！うえーん」泣きだしたちえを横目にユウサクは家上がりこみ「お母さん！」

部屋に上がると母がベッドに座っていた。

赤ん坊に乳を飲ませながら。

「ユウサク、しんどかったやろ。おとうさん運転荒いからなあ」
「お父さんやない！おっちゃんや。」
「あかん！今日からお父さんっていわな！ええな！」
厳しい口調でそう告げられ、なにもいえず抱きしめてもらえず。

（高知へ帰りたい・・・）

久し振りに枕を濡らしながら眠りにつくユウサクだった。

UJU

家族

第五章・・・家族

ユウサクには一度に同い年の妹と6才下の弟ができた。この年まで一人っ子、そして祖母に溺愛され甘やかされて育ったユウサクに母は特別厳しかった。連れ子である事からひできに遠慮し、ユウサクにも遠慮を強いた。ひできもしつけには厳しかったが、しかし自分の娘であるちえと分け隔てなくユウサクと接していた。

ひできは大学在籍中に大阪の万博で「土産物」を売る商売を仲間とはじめ、大儲けしてまとまった金を作った。その頃は地元のやくざに筋を通しておけば、大概の商売は勝手にできた。その元手で西宮にスナックを出して商売を始めた。まだ22才の頃である。

もともと三重の田舎の名士の長男で、親の期待を受けて文武両道。屈指の進学校に進むも、もち前の正義感と仲間おもいがあだになり、数度の喧嘩で放校処分になる。なんとか北海道の親戚をたより、小樽の高校を卒業。剣道で大学にすすんだが、伝統を重んじる名門大の剣道部の中ではひできは「異端」であり、卒業まで部に所属する事はかなわなかった。

店を始めてすぐに出入りしていた客であるちよこ（元妻）と交際を始め、妊娠結婚。ちえが産まれる。ユウサクが産まれたちようご一ヶ月後である。

店はお世辞にも儲かっているとは言えなかった。昼にも食事を出し、常連を集めたが、夜はジュークボックス目当てでやってくる貧乏学

生や、カミナリ族（暴走族）の若者ばかり。面倒見のいいひできはこの若者たちに飯を食わせ、酒をふるまって可愛かった。その頃、一人でふらつと店に来だした小柄な女性にひできは興味を持つ。近所のOLかと思いきや「人妻」それも子持ちだという。これがよしことの出会いだった。

何度か「妹」と「息子」を連れてランチを食べにきた。ひできも激しい恋愛感情の末の結婚ではなかった。迫られたうえに妊娠したと言われ、流れて結婚していた。お互いが「激しい劣情」に餓えていた。出会うべくして出会った二人だった。

関係を持ちだしてしばらくして、よしこは離婚する。ひできの妻のちえことも懇意だったよしこはそのままひできのスナックに「住みこみ」として上がりこみ、素知らぬ顔でひできと関係を持ち続けた。ひできからすれば二年もの間、自宅に「本妻」「愛人」を住まわせて二重生活を続けていたわけだが・・・ちよこが気がつかぬ筈もなく。当たり前前の修羅場をくぐり、本妻であるちよこが娘をおいて出ていった。

それから離婚が成立して、よしこが正式な妻になり、弟のかずやを身ごもった時、ひできが「ユウサクを迎えに行こう」と言いだした。よしこはユウサクについては半ばあきらめていた。というより、別れた夫に瓜二つのユウサクと同じ屋根の下で暮らしていく、育てていく自信がなかったのだ。

ひできはよしこの気持ちをくみ、出産が終わるまで気長に待ち、いたわり、最終的には「自分の子だ」とまでいつてよしこを納得させてから高知に連絡をいれて一人で迎えにいった。2人旅をする事によってすこしでも触れ合っておこうと考えていた。

五人家族の生活はつつましかにスタートした。しかしその頃にはスナツクの経営は悪化し、最初の元手も底をつき・・・店をたたむしかないところまでできていた。ひできは近くに部屋を借り、自分は道路工事の会社に就職して家族を養った。

ちえとユウサクは同じ幼稚園にかよい、兄弟として過ごしていたが、イニシアチブはいつもちえが持っていた。母親のよしこがそう仕向けていた事もあり、ユウサクは喧嘩になるといつもちえに譲った。

ある日幼稚園から帰る途中で「先に帰って！うち、お友達と用事があんなん。」ちえからそう言われ、ユウサクはひとりで家路につく。

よしこからちえの所在を聞かれたが、判るわけもなく叱られた。ちえは帰ってきてもなんの説明もせず、食事もとらずに寝た。よしこに尋ねられると「お友達のところでお呼ばれしてきてん。」というばかり。

次の週にも同じ事があり、さすがに心配になったよしこはひできに相談する。なにか思いついたひできが一本電話をかけ、なにやらどなっていた。そしてちえを連れていき2人ではなしていた。

ちえは実の母であるちよこと会っていた。ひできはちよことちえを交えて何度か話し合いをしたが・・・その月のうちにちえはちよこに引き取られていった。ひできからすればかなり辛い事だったとおもうが、よしことユウサクの手前、至極明るくふるまっていた。

こうして弟のかずやとユウサク、両親の4人の家族構成になった。

読書少年

第六章・・・読書少年

ユウサクが小学校に上がる前に、ひできの転職に伴い、一家は神戸に移り住んでいた。高知にいる頃に祖母の都合で何度か神戸の叔母はるこの家に預けられた事がある。2才上の従姉弟のよしはるはよくユウサクと遊んでくれた。だから、久し振りに会うユウサクの「感じ」が変わった事を誰よりも早くきづいた。

「ユウサク、なんやおとなしなつたなあ・・・おもんないわ」

よしはるのこの一言で叔母のはるこもなにかを感じていた。

ひできの家にきてからのユウサクは、ひできを気遣うよしこの顔色ばかりを伺い、自己主張もない無口な大人しい子に変貌していた。それをはるこから聞かされた祖母は、その年から毎年夏休み、冬休み、春休みには前もって飛行機の切符を手配してよしこに送りつけ、ユウサクを高知で過ごさせた。高知にいる時だけがユウサクがユウサクらしく過ごせる時間になっていた。

ユウサクは小学校に入学した。家が近い事もあり従姉弟のよしはるが最初は一緒に登校してくれた。そしてユウサクは学校が終わっても自宅に帰らず、はるこの家でよしはるの帰りを待つ。よしはるが帰宅して一緒にキャッチボールをしたり、よしはるの友達と一緒に遊んだりして過ごした。

よしはるはかなり活発な子供で、学校から帰るとランドセルを玄関で放り投げそのまま遊びに行くような子だった。長男と言う事で期待をした両親は、たくさん書籍を購入していたが、よしはるが目

を通す事はなく、子供部屋の本棚はまっさらなままの名作全集、伝記、百科事典がところせましと並んでいた。ユウサクからすれば「宝の山」であり、よしはるを待つ間、必ず読書するようになった。しまいには読書を止めるのが嫌で、よしはるの誘いを断る程熱中して読書にふけた。

「ユウサクが読んでくれるんやったらおばちゃん、がんばって本ぎょうさんこうてきてたんも無駄になれへんわ。いっぱい読んでかしくなり！」あては外れたものの、可愛い甥が読んでくれるのだからと、はるこはさらに書籍を増やしてもくれた。ユウサクの一番のお気に入りには「シートン動物記」なかでも狼の「ロボ」が主人公の話は何度も何度も読み返した。

よしこが生んだ弟のかずきは、愛らしく利発な子供で、ユウサクも可愛がっていた。しかしなにかのはずみで自分の孤独を弟にあたりちらし、いじめる事もあり、ユウサクはよしこにいつも叱られていた。ひできはといえば、ユウサクを自分の子！として可愛がり、分け隔てなく接していた。(つもりだろうと作者は考えます。)しかし人間というものは何かのはずみで本音がでたり、態度にでたりしてしまう。もちろん実の息子のかずきのほうが可愛いに決まっているのだが・・・黙って顔色を見るばかりのユウサクは、過敏に反応し、ひできと言葉を交わす事もほとんどなくなっていた。

ユウサクが3年生になった時、ひできの転勤で神戸から大阪の八尾に引っ越した。「転校」といえば、普通は友達がかげより、「がんばれ」とか「忘れないで」とかがあってもよさそうだが、友達付き合いが極端になかったユウサクには誰も会いにこぬまま静かに引っ越しは終わった。

そして一年がたち、大阪から九州の福岡に転勤がきまり、しづるよ

しこの説得にひできは単身赴任して半年かけた。引越した冬、福岡は大雪で、生まれて初めて40センチ程積った雪をみて（飛行機まちがったんかなあ。ここ・・・北海道や）と思うユウサクであった。

つづく

パイロット

第7章・・・パイロット

「僕なあ・・・おおきなったらパイロットになんねん！」

YS11（国産旅客機、現在飛んでません。）の操縦席に座らせてもらい、隣に座るパイロットにそう誇らしげにユウサクは語った。

「そうかそうか・・・じゃあおじさんの後輩になるんだな！がんばれよ」

ユウサクは小学校2年生になっていた。毎年、春、夏、冬休みは高知の祖母から送られてきたチケットで高知行き飛行機にひとりで乗り、休みの大半を高知で過ごした。よしこから空港バスに乗せられ、伊丹に着くと、自分で窓口まで行き、「ジュニアパイロット」の申請をする。そうすればCAや、航空会社の地上勤務のお姉さんが控え室に連れて行ってくれて、ジュースやキャンディーなどをくれた。後はフライトに併せて飛行機に最初に乗込み、席に案内してくれる。目的地に到着すると最後まで残り、希望すれば操縦席に座れたりもする。子供にとっては大変な特典だった。

高知空港にさえつけば、カツオ飴（高知の銘菓）の老舗のおかみである祖母の事を知らぬ者はいない。売店のおばちゃんから、職員さえもが声をかけてくれた。「おお、ユウサクくん、今からおばあちやんちにいきゅーが？」「うん、いまついてん！」「たまるか！またがつつりお年玉もらってかえるがやる（笑）」「えへへ・・・」ユウサクは祖母に溺愛されていたが、近所の大人やまわりの住人に

も可愛がられた。正月になるとユウサクのお年玉行脚がはじまり、くまなくご近所をまわり・・・帰る頃には10万単位のお年玉をかばんに詰め込んでいた。(もっとも、ほとんどよしこが徴収してしまい自分で使った記憶などあまりないのだが。子供ゆえに春になるとすっかりお年玉の事など忘れてしまっていた。)そんな会話をしていると、祖母かりつこが迎えにくる。

高知につくと、まず祖母と一緒に買い物に行く。よしこには行き帰りの服だけを詰めさせて、都電西部で日用品や着替えを買うのである。ユウサクもこの頃は高知にいくのがすごく楽しみだったし、祖母にしてみても首を長くして待っていたのだらう。仕事のかたわらユウサクをいろんな所へ遊びに連れて行った。とは言え、冬はこれといってやることもない。(夏なら、鏡川にワタリガニをとりにいったし、祖母の田舎まで行って、川漁に出たりもした。)もっぱら外食につれていったり。飴の配達にユウサクを同乗させて、遠距離の場合、宿をとって一泊したりと、とにかく目に入れても痛くない程の可愛がりようであった。

祖父(祖母の再婚相手)は亡くなり、りつこも嫁にいった。相変わらずカツオ飴と喫茶店の二束のわらじでりつこがいないと仕事にならないので、祖母が毎日来るりつこ。どちらかが家にいた。自分が結婚する!とっていたりつこが嫁にいった事は幼いユウサクにとつて「不本意」ではあったが、りつこの主人もユウサクをよく可愛がり遊んでくれていたので、ユウサクに不満はなかった。

朝食はモーニングセット、物心ついた頃からコーヒートーストを食べている。昼食はランチ、おやつはミックスジュースかクリームソーダ、夕食は店を閉めてから、二人で食べる。普段は野菜や魚を好んでたべる祖母も、肉しか食べないユウサクに併せて献立をつく

る。ユウサクの好き嫌いに拍車をかけていたのは・・・祖母のようである。

祖母の家から歩いて5分程のところに「模型屋」があった。飛行機が好きなユウサクは祖母から小遣いをせびっては飛行機や車、戦車などのプラモデルを買ってきた。手先が特別不器用。と言う程ではないが・・・ユウサクは短気であったため、部品が不良で、サイズが合わなかったりすると、すぐに癩癢をおこし作りかけの模型を叩きつけて壊した。男親の代わりにいかなかったのがユウサクにとっての不幸だったのかもしれない。（当時のユウサクはひできに何かお願いをする・・・などというコミュニケーションはとれなかったのである）

「パイロットになりたい！」これはユウサクが中学3年になって（偏差値）という、現実を知るまでつづいた「将来の夢」であった。

つづく

友達（前書き）

なかなか進まないかもしれません。

友達

第八章・・・友達

二度目の転校をして福岡に来た時ユウサクは10才四年生がもうすぐ終わる、という頃だった。

母よしこはひできとの二人目の子供となる男の子を出産して子育てに忙しい毎日を送っていた。2人目の弟(戸籍上は二男)ひでおである。

引越しが終わつてのユウサクの感想は(めっちゃ広い家や。父さん社長になつたんかなあ・・・)間取りは平屋の4DK、庭こそ広かったが神戸、大阪あたりで育つたユウサクの感覚では、庭付き一戸建て「社長・・・というイメージができ上がっていた。

自分がこれからかよう小学校に、手続きもあり行つてみる。距離はバス停で5つ程・・・ユウサクの感覚ではとても子供が歩いて通う距離ではなかったが、みんな歩いて通つていると言う(嘘やん、とおぎる・・・)とりあえずよしことともに歩いて行つてみる。30分かかった。

昼はとつくに過ぎてから家をでたので、あらかた授業は終わっていた。ホームルームを待つて教室に案内され先生の提案でユウサクの自己紹介の後、全員から自己紹介を受けた。(あまり人に興味がなかったのであまり聞いていなかったが・・・)一緒に帰ろうというクラスメイトの誘いを断り、ユウサクは先に帰った母よしこにもらった金でバスに乗って帰った。

次の日、外は大雪。あまりの寒さに「今日は行きたない・・・」と
ごねてみるも、よしこに通用する訳もなく追い出されるように自宅
をでる。

コーデュロイ（当時はコールテンとってました。）の長ズボンに
トレーナー、スタジャンを着込み手袋。完全防備で歩いていると、
まわりにおそらく同じ小学校に登校するのだから子供たちが歩いて
いたが、みんなユウサクを面白い物でも見るようににやにや笑いな
がら見ている。

それもそのはず、季節感がずれているのである。全員が半ズボン、
しかもジャンパーを着ている子自体少なく、中には半そでTシャツ
一枚や、ランニング一枚の子までいる。（こいつら頭おかしいんち
やうか？寒くないんやろか？）ユウサクはそう思った。

すると前から3人組の（やはり半ズボンの）男の子がやってきた。

「おお、おはよう！」・・・「恐らくクラスメイトであろう人物
にユウサクは返事が出来ないでいた（あかん、ぜんぜん覚えてへん）

「なんやあ、きさん！むかえにきてやったっつえ！おはようぐらい
言わんや！」

なんと挑発的な言葉だろう・・・ユウサクはそう思っていた。

「ああ、ごめんな、ええっと・・・だれやったかわすれてもてん、
名前教えてくれへん？・・・ああ、おはよう」

ああ、そういいいながら、大、中、小（身体のサイズがまさにそう
だった。）はそれぞれ山口、田村、穂波と名乗った。

それからいろんな話をしながら学校まで歩いた。半ズボンの話も聞いてみたが、学校が「元気な児童」を奨励していて、半ズボンや半そで一年通して通学すると、終業式などで「表彰」されるという事だった。

（あほらし・・・ぜつたいせえへんわ。）そう思ったユウサクだが、クラスメイトに「大阪人は寒がり！」などと揶揄されてしまい、自然と半ズボンを履くようになった。（もちろんジャンパーは脱がなかったが）

そしてそれから学年が変わるまでこの4人は登下校も日曜日もいつも一緒だった。

思えばユウサクが「友達」というものを自宅に招いたのもこの3人が初めてで、いふなれば「生まれて初めての友達」である。

つづく

友達（後書き）

どう繋げていくか（若ものになるまで）考えどころです。（笑）

コミュニケーション

第九章・・・コミュニケーション

転校性・・・意味無くまわりに人があるまる。

ユウサクは自信転校は初めてではなかったが、それにしてもこんなに自分に人が寄ってきた経験はなかった。(結局関西人というのが理由のようだったが)みんないった「なんか喋れ!」「なんかつてなんや?」

・・・

「すげーっ!大阪弁!」「・・・」(あたりまえやん・・・)そんな事の繰り返しも一週間もあれば終わった。ユウサクは自分とみんなの方言の違いに辟易していた。

ある日昼休みにクラスの男子がドッジボールをしていた。

ユウサクは仲間に入りたくて「なあ寄せて!」(仲間に入れて)と近付いて行った。

「なんや?お前 かたりたいとや?」(同じく仲間に入る事)

ユウサクにはこう聞こえた「語りたい?」(話したい?)

だからこう答える「いいや別に語らへんけど?」(話す事ないよ)

「かたらんなら邪魔やけん、向こうに行け!」

(なんや?意味判らへん・・・)言葉の意味を理解したのは2日後だった。

またある日の事友達から電話があった。

「いまから遊ぶや?」「ええよ!どこであそぶん?」

「なら・・・いまからお前んち 来るけん」(お前の家に行くから!)

「えッ俺がいくんか?」

「はあ？俺がそつちに来るけん！」（そつちに行くから）

「・・・・・・？」

「わかったとや？」「も一回きくで？こつちに来るんやな？」

「おう！そつたい！何回もききやんな　しゃーしかね」（めんどくさいなあ）

「しゃーしーってなんや？」「しゃーしーはしゃーしーたい！」

万事この調子である。友達とコミュニケーションが完璧にとれるようになるまで数か月を要した。

ユウサクがすんでいる地域はいわゆるベットタウンで人口密度が高く、同じ町内でも細かく区域わけされていて、ソフトボールのチームもいくつかに分かれていた。同じ区域のクラスメートから「ユウサク？ソフト入るっちゃう？」と聞かれ、それぞれのチームを聞いてみた。

例の3人組山口、田村、穂波はそろって隣の区域のチームで、ユウサクとは別だった。（なーんや・・・しょうもな。）それでもほとんどの子供が参加しているので急かされていつてはみたものの・・・

ユウサクも大阪ではソフトには入っていた。レギュラーではなかったが（ユウサクは守備が下手だった。）バッティングは評価されていたので必ずここぞという時には代打で出場し、よく打った。

だが、ユウサクが入ったチームは（人数が多い事もあり）5、6年生がレギュラーで決定していて、4年生は監督の息子だけがレギュラーになっていた。（そんなにうまくも見えなかったのだが）あと

は球拾いに決まっっていて・・・初顔のユウサクに監督はいきなり激しいノックを10球ほど打ち込んで「駄目やな！お前は球拾いとラニングだけしとけ！」と言い放った。何となく納得がいかない（打たせてくれへんのかな？）見せ場がほしいユウサクは「打たせてもらってもいいですか？」と監督におずおず訴えた。聞こえないのか返事がない。それでもじつと返事をまつユウサクをしばらく無視していた監督は、動かないユウサクの方を向いて「俺の言う事がきけんならもう帰れ！」と怒鳴った。

チャンスも貰えず、どなられて納得できないながらも、その場は思いとどまって球拾いをこなしたユウサクだったが・・・

ソフトボールには二度といかなかった。

コウチャン(前書き)

そろそろ「少年」編は終盤にさしかかってきました。

コウチャン

第十章・・・コウチャン

ユウサク中学一年生。13才になっていた。

関西弁もほぼとれていっばしに博多弁を使う生意気な少年になっていた。

ユウサクの生まれた昭和42年は、前年が「丙午」という事もあり、かなりの出産ブームであった。中学生になった時、ひとつ上の学年は9クラスだったが、ユウサクの学年は10クラス（しかもひとつクラスの数も違っていた。）ユウサク達の世代の為に3年前に近隣にひとつ中学が増設された程である。

中学に進むと、同じ小学校だけではなく近隣の3つの小学校から子供たちが集う。クラスメイトの3分の2は初めてみる顔であった。

ユウサク自体は小学校で別段人気があった訳でも嫌われていた訳でもなく、平平凡凡と生活していたが、この「中学入学」というイベントは慎重に過ごさねば「痛い目」をみる・という事をユウサクは知らなかった。

クラス分けがなされ、指定された席につく。見渡す限り知らない顔である。（うわー・・・参ったな。）同じ小学校の出身者は何となくわかるが、口を聞いた事もない顔ばかり。観察を続けると・・・斜め前の席の男子がやはり全員を観察していた。ユウサクはその男の髪型に目がいった。（なんだあれ？）全体的に後ろに流した髪は

前髪だけが前に飛び出ていて真ん中がうねっている。(いわゆるリ
ーゼント) 同年代の人間にこんな髪型(セットする概念すらなかつ
た頃)をしている人間を初めてみたユウサクはおかしくて・・・つい
笑ってしまった。

「おい！きさんこらあっ！なんが可笑しいとや？今わらったろーが
？」

突然その男が立ちあがりユウサクの前にやってきて怒鳴りつける。
体格はユウサクよりもかなり多柄である(ユウサクは13才のとき
148センチしかなかった。)とりあえずたちあがってにらみ返す
も、なんで相手がおこっているのかわからず、返す言葉が見つから
ない。

「だまつとかんで何かいわんや！おおっ！なんでわらったとか？」

「髪型が変やけん・・・へんな髪やなあって思っつて。」

「なんてか？」男はユウサクの襟首をもち顔の傍で大声をはりあげ
る。

(なんでこげんなるとかいな・・・でもなんかいいかえさんと気分
悪い) そう思っつたユウサクだったが、やっと覚えた博多弁も喧嘩と
いう応用編までは使いこなせない。(しゃーないな) 頭の中のスイ
ッチを切り替え！大阪の人間に戻って応戦した。

「なんてか？つてなんや！おのれだいたい誰に向つて口聞いとんね
ん！」「けつたいな頭してるから笑ろただけじゃ！ぼけえ！」

一気にまくしたてると相手は意外にもびっくりして止まっていた。

(これをチャンスとみたユウサクは止めておけばいいのに続けた。)

「われ、今度えらそーな口きいたらしなん程度にいてこまずぞ！」

「……しばらくだんまりが続いた後、「いてこまず？……もうよか。」
相手はユウサクの肩をたたいて「すまんかった。ちよつといらついとつたごたあ……」と素直に席にもどつた。（勝つた？）

それから何事もなく担任の挨拶などが終わり。クラスメイトと仲良くなるうとするが……何となくみんなよそよそしい。（あれ？……何？）不思議に思っていると、どやどやと教室になだれ込むように、男達が5〜6人教室に入ってきた。「コウチャン！どげん？もうみんな締めたと？」などといいながら、あの斜め前の男と同じ髪型の男たちがまわりに集まってくる。（なんだかいやな予感がするなあ……）とユウサクが下を向いていると、クラスの子の一人が「なんかね、あいつがコウチャンにちかつぱいおおちやくい事いいよつたんよ！」その女子の指さす方向に男ども視線が集まる。（やつぱりこういう展開か……）

そう……みんなユウサクのまわりに集まりだした。間違いなく全員自分とは違う小学校出身者のようである。

「なんやあ？なんばゆうたとやきさん！」「お前コウチャンに生意気ゆーたとか！こらあ！」「くらつっそ！」「やつつけるぞ」
まわりから雨のように罵声やののしりが響くが、ユウサクはなにもしないかえせなかった。

「やめとけ！そいつは別になんも悪ーない！」「そうコウチャンが一括してその場はおさまった。しかし……初日でユウサクは1年を棒にふってしまったのである。

コウチャンはとなりの小学校からきていた。3人兄弟の三男で、兄2人はこの中学でも有名な「不良」だった。したがって「コウチャン」は同世代の中心人物になるべくしてなった「つつぱり王子」なのである。

だから、初日に自分たちの「コウチャン」に食って掛かったユウサクの事をまわりは決して許さなかった。関係ない筈のユウサクと同じ小学校の者も、もともとユウサクと交流があった訳でもなく、「われ関せず」すなわち「シカト」したのである。ユウサクは完全に孤立した。不思議な事に当のコウチャンだけはたんとんと普通にユウサクに接していたが、「お前コウチャンと喋るとか生意氣たい！」とまわりからは言われ、火種が増えただけだったが……

別に孤独に耐えられないわけでもなく、ユウサクは「村八分」となっても平気で登校し続けた。直接暴力を受ける場合もあったが、計算高くたちまわり、相手が一人の時は応戦したし、複数の場合には走って逃げた。特別「悲観」もしなかった。話相手がいない事もあり、毎日図書館にいき読書に没頭するようになった。毎日2冊は読んでいた。

入学から半年もすると、学年の中で「誰が強いか？」という評価がだいたい決まってくる。学年350人の中で半数が男子、そのベスト10にユウサクの知っている名前が昇るようになる。「山口、田村、穂波」

そう、あの3人である。中学に入ると、各自に新しい付き合いが増え、（ユウサクは増えてないのだが……）めったに会う事もなかったのだが……（へえ〜不良になったんだ）ユウサクの感想はただそれだけだった。

ある日、ほしいレコードがあり自転車でレコード店に出かけた。

「ユウサク！」声をかけられ、振り向くとコウチャンがいた。
「なんか買うとや？」「えッ・・・うん」
「これがいいぜ！」みると横浜銀蠅のアルバム・・・全然興味はなかったが「ふーん・・・じゃあこれ買おうかな」勢いで買ってしま
う。

帰りは二人で話しながら帰った。

「なんかすまんかったな。」改まってコウチャンが語り出す。
「なにが？」

「おれと揉めたけんお前、なんか嫌われてしまっってから・・・」
「でもコウチャンは普通に喋ってくれようやん」

「だってお前を嫌う理由ないし、みんなにもたいがいしとけってい
いよちゃばってんが・・・」

「いいよ、別に困ってないし」
「ところでお前2組の山口達と仲のよかつちやる？」

「うん、最近あそんでないけど」
「なら2年になったらおんなじクラスになったらよかね！」

コウチャンはなかなかの人物だった。（みんなに好かれるだけの事
はあるよね）ユウサクはコウチャンの事が少し好きになった。

はたして2年生のクラス替えにて、ユウサクは山口達と同じクラス
になり、またよく遊ぶようになる。一年のクラスから一緒にあがつ
た者たちは変わらずユウサクをのけものにしようとするが、実力者
の友達！という肩書きが知れ渡ったユウサクに対する扱いは・・・
あつという間に変わってしまう。（なんやこいつら？手のひら返し
たみたいにな）

ひとつの「社会」で円満に生活していくのに「コネクション」と「
立ち回り」がいかに大切か！という事を若干14才で知ってしまった

たユウサクであった。

つづく

コウチャン(後書き)

引き続きがんばります。どうぞ応援お願いします。

別れと始まり

最終章・・・別れと始まり

この章で、ユウサクの少年期の話はほぼ終わるのだが・・・それに伴いユウサクが小学校の時にトラウマになった事から語らねばならない。

ユウサクの母よしこには姉のはるこ、妹のりつこがいる。そして物語に登場していない弟（ユウサクの叔父）たつやがいた。りつこは3人とは父が違い、一人娘として育ったが、親思いの素直な娘に成長していた。

一方たつやは末っ子としてわがままに育ち、中学の頃から素行が悪く、ロクに高校もいかないまま悪い友達とヤクザの事務所にいりびたり、そのまままるで「就職」するかのようになり構成員になっていた。

ユウサクが初めてたつやに会った記憶はたつやが結婚した時だ。まだ小学校にあがったばかりで記憶もあいまいだが「盛大」な式だったのは覚えている。そしてたつやの妻のりこが美しかった事も・・・

ユウサクはたつやが苦手であった。恐ろしかったのである。うちに来て酒を飲んでよしこと大ゲンカし（兄弟のうちこの二人は大変仲が悪い）激昂するが、ひできに諭されておとなしくなる。（たつやはひできの事をほんとの兄のように慕っていた。）そして酔いが

覚めると必ずいやがるユウサクを無理やり連れて風呂に入る。その時に半身にくまなく描かれた「刺青」がまたユウサクをおびえさせた。

それから何年かたち、たつやがひできの世話でまっとうな会社に就職する事になった。(今思えば足を洗ったのであろう。) そのお祝いにたつやとのりこがうちにやってきた。心ばかりの料理と酒をひできにすすめられ、たつやが泣き、のりこことよしこもつられて泣いていた。不思議な光景だった。(いっつも喧嘩してんのに・・・) ユウサクには理解できなかった。

そして夜も更け、ユウサクは寝ていたが、話声や物音からしてどうやら二人は泊っていくらしい事がわかった。(やったー) ユウサクは喜んだ。たつやは大の苦手だが、のりこは大変美しく、やさしかった。ユウサクはのりこが大好きだった。そのまま眠りについたユウサクは朝早く目が覚めた。(おしっこ・・・) むくつと起き上がったがとなりにはたつやとのりこが布団を引いて寝ている。起こすまい・・・とゆっくり脇を抜けようとするが、せまい部屋なのでうまくいかない。しかたなくまたいでいこうとしたそのとき、のりこが寝返りをうち布団がめくれた。

よしこから借りたであろうネグリジェ姿に目はくぎづけ(ませた8才です。) まっ白いすきとおるような肌が透けてのぞいた。うつぶせのその背中ユウサクは完全に息が止まってしまった。美しい肌のうえに、同じく美しい千手観音が描かれていたのである。(のりこおばちゃんも?) これからしばらくユウサクはこの光景を夢に見る事になる。

たつやが結婚したのりこは所属していた事務所の幹部の娘だった。「足を洗いたい」というたつやの願いを聞き、ひできが骨をおり、その幹部のもとに出向いて話をし、組の許可をもらい、はれて「堅

気」になれたのである。

それから7年、ユウサクが高校に入学してまもなく、よしこの元へりつこから電報が届く。「八八キトクスグカエレ」

高知の祖母が倒れたらしい。よしこはともかくにも、自分より先にユウサクを飛行機に乗せた。「後悔せんように、あんたは世話になつてたんやから！」久しぶりの高知行きであった。

あれだけ頻繁に通っていた高知だったが、中学も2、3年になると「おばあちゃんち」に行くのは億劫で恥ずかしくなっていた。しばらくは電話などがあつたが、「男の子やきね、しょうがないちゃ」祖母はよしこにそう漏らして、高知にこさせるのをすぐあきらめた。

ユウサクがひとりで病院までいくとたつやが待っていた。「おれは30年おうてへんかつたけど・・・いちおう生みの親やからな、お前はさんざん世話になつとつたんやろ！はよ顔みしたれ。」

たつやにそういわれて病室にはいったが・・・もう口にまでチューブが差し込まれていた。もちろん意識はない、テレビでよく見る光景をまのあたりにして（もう助からないんだ）ユウサクにもそれはわかった。

その晩祖母は亡くなった。不思議と涙は出なかった。（自分は冷たい人間なのだろうか？）まわりはみんな泣いているというのに。お通夜が次の日になったので、ユウサクはたつやと同じ部屋で眠りについた。しらふでひどくまじめなたつやといる話した。高知の事、高知に住む親せきの事。次の日は朝早くにたつやに頼まれて、

一緒に親戚のうちを尋ねて、たつやは自己紹介をしては頭を下げてまわった。(おつやでみんな会うのに・・・)ユウサクはそう思っていたが、たつやはその前にみんなに顔を見せたかったようだった。

通夜が始まる少し前にひできとよしこが第二人を連れて到着する。またもやよしことたつやが、来るのが遅い、だの遅くない、だのと言い争いをはじめるが、姉、妹にたしなめられてすぐに終わった。喪主はりつこか、りつこの主人が務めるのが筋なのだが、りつこの主人はたつやに、と願い出た。当のたつやは固辞していたが、祖母の弟であるおんちゃんに一言いわれてしまう。

「おんしゃあが息子つちゆうんはみいんなわかつちゆうき、せつかく立派な長男がおるのに娘婿が喪主じゃあ、本人もつかばれんる？筋はちごうちゆうかもしれんけど・・・黙ってやつちやりや」

高知の親戚筋もこの一言で納得。本意ではないながらも見事喪主を務めた。(たつやのおつちゃん・・・けっこうかつこええな。)

葬儀その他無事とどこりなくおわり、ユウサクは家族とともに福岡に帰る。そして休んでしまった学校へと戻り日常がはじまった。

それから数カ月後、仲のよい友達と集まって話し合いをすることが多くなっていた。もうすぐ高校二年という頃である。議題は「どうすれば、女の子にもてるのか？」である。何か趣味を始め、ついでに彼女をゲットする！というなんとも稚拙な作戦会議であった。(ちなみに小学校からの仲のあの3人組とは、高校に入ってからあまり遊ばなくなっていた。中二から友達が増えたユウサクは他にも交流

ができていた。そして・・・今思えば、この会議に参加していた4人が、ユウサクにとって生涯の友、と呼ぶべき存在になるのである。

結果・・・サーフィン、バンド、このどちらかに的を絞っていきましょう！

そう決めたのであった。ユウサク16才の春、あと4か月で17才を迎える頃であった。

少年ユウサク物語・・・・・・・・・・完

別れと始まり（後書き）

ここまで読んでいただいた方へ・・・どうも有難うございます。これから第二部にむけて構成を考えていきます。（実は先に書いた完成稿があるのですが、完成度が低い為書きなおそうと思っています。）ご期待下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6828e/>

少年ユウサク物語

2010年10月20日19時54分発行